

河鱒源治君と私

市古 宙三

河鱒源治君は一昨年に蓄膿症を患つてから、小田原市立病院にときどき通つていた。昨一九九〇年九月二九日朝も通院のため家を出たが、途中で倒れ、救急車で病院に運ばれる途中に逝くなつてしまつた。心筋梗塞による急性心不全のためである。私はその日の午後この報を得たが、とても本当とは思えなかつた。というのは九月二〇日には、墓参りの河鱒君に小林通雄君を交え、三人で東洋文庫で二時間ばかり雑談をし、最後に河鱒君の愛用するカメラで互いに写真を撮りあつた。さらに帰途、河鱒君が本を買いたいといふので神保町に立ち寄り、コーヒーをすすりながら小一時間、また三人で話をして別れた。彼の元氣な姿に接してから、まだ一〇日と経っていない。それだけではない。九月二八日の夕には彼から電話があり、相変わらず元氣な声で長々としゃべつていたのに、その声が、一昼夜もしないうちにもう聞けなくなるなんて。訃報を聞いて、私はすぐ小田原蓮正寺の彼の家に行ったが、書齋の机上には、先日買ったばかりの本が置いてある。病院に持つてい

つたカバンの中には、小林君と私とに宛てた写真入りの封書が、投函するばかりになつて入つていたのを知つては、涙を催さざるを得なかつた。

河鱒君とは妙に縁があつた。東大の同級生であつただけでなく、卒業論文も同じく朝鮮のことを取り扱つた。そして一九四〇年代の終わりがごろからは、二人とも太平天国史の研究をはじめ、一九五〇年には、太平天国に関する二人の処女論文（河鱒「天朝田畝制度の成立について」、市古「太平天国詔書の改正について」）が同一誌（『東洋学報』三三二）に並んで載つた。まさに奇縁といふべきだろう。移り氣な私は、しばらくすると研究テーマを他に移してはまた太平天国にもどる、ということを繰り返してしたが、河鱒君は終始一貫、太平天国から離れることはなかつた。そして一九七九年からは、彼も研究員となつて、二人は東洋文庫の研究室で席を並べることとなつた。

私たちの研究法は、二人が池内宏、加藤繁、和田清の三先生の教えに殊更そむくような生徒でなかつたことを知れば、自ずから明らかであらう。學術論文といふものは、考証を重んじた実証的なものでなければならぬ、と私は今でも信じているのだが、そんな論文は近代史ではなかなか書けない。それでも無理をして、私はこの種の論文を幾つか學術雑誌に書いたが、それらは殆ど誰にも顧みられな

い。皮肉にも、私が書いたもので学界に注目され批判されたものは、旧師に見せたら怒られそうな、史料を通観して自分の何となく感じたところを、史料も掲げず典拠も示さず、サツサと書きなぐったものである。そして正直なところ、私もどちらかといえれば後者の方が好きで、それを得意とした。

これに反して、河鱈君は実証史学の正当派といつてよろう。史料は、欧文のものを含めて、丹念に漁り集める。内外の研究は、著書も雑誌論文も、悉くといつていいほどよく読み消化する。これらの点は昔からずっと変わりが無い。高校の教師をしながらよく出来たものだ、自分を省みてただ感心するばかりである。ただ彼の研究歴を仔細に調べてみると、ブランクの時代がある。一九六六年から七五年にいたる一〇年間で、これは彼が高等学校校長の要職にあった時代にあたる。高校長がいかに激務であつたかを推測させる。それは兎に角として、このブランクの時代を界として、彼の研究の在り方にいささか変化がみられる。前半の時代には、太平天国が占領した地方をどのように統治したかを明らかにしようと、天朝田賦制度や郷官、商業、税関などの問題を究明して、本格的な研究論文を何篇も発表した。それらは何れも世界的にみて優れたもので、さればこそその中の二篇は英訳されているのである。ところが

後半になると、このような論文はほとんど影をひそめてしまつて、書いたものは大部分が研究動向か、書評、論文評の類となつてしまつた。私は彼から、何故そうなつたかを聞いてはいない。強いて推測すれば、高校長を辞めてから後は、研究のための時間的余裕が十分になつて、余りにも多くの史料、論文を読み、余りにも多くの事を知つてしまつたせいではあるまいか。

変なことをいうな、と思われるかもしれないが、中国近代史研究の難しさは、日本で利用できる限りにおいては、良い史料、即ち信憑性の高い史料が案外になく、下らない史料、即ち信憑性の低い史料が有り余るほどあることにある。下らない史料であっても、唯一つしかないのならば、まだ始末はいい。それがたくさんあると大変である。自分が想定している結論に具合の良い史料ばかり、というようなことは滅多に無く、具合の悪い史料が必ず幾つか出てくるものである。そういう場合、厳密に研究論文というなら、都合の悪い史料については一々、何故それを捨てるかを弁明しなければならぬ。そんなことをした論文には滅多にお目にかかれないが、だからといつて、それでいいわけではない。しかし現実には、それを弁明することは、至難の業に近い。河鱈君が最近になつてから、昔のように研究論文を書かなくなつたのは、そのためではなからう。

か。研究していなかったからではない。逆に勉強しすぎ、知りすぎたために書けなくなつたに違いない。しかしよく知つてゐるのだから、他人の書いたものの批判はできる。だからこそ彼が近年に書いたものは、研究動向や書評、論文評が主となつたのであつて、それらは内外の論著や史料を多く引いていて、研究論文に優るとも劣らないといつていい。初心者はもとより、既成の研究者にとつても、一度は読んでみるべきものであろう。中国人の論文に対する彼の批評が中国の雑誌に翻訳されているが、このことは、彼の書評や研究動向が如何に優れているかを物語っている。彼を失つたことは、学界にとって一大損失といわなければなるまい。

私の損失はさらに大である。私が河鱈君に啓発されたのは、ただ単に公刊された雑誌論文からだけではない。彼が東洋文庫の研究員になつてからは、自ずから彼と会う機会も多く、会えば話は太平天国へと向かつていった。近年になつて、彼は余り上京しなくなつたが、それでも少なくとも一月に一度ぐらひは、彼から長い電話があり、話し合ひの時間は十分にあつた。太平天国の話は万般にわたつたが、どちらかといへば、私の方から話をきりだす場合が多かつた。彼が知つていて私の知らないことが多かつたからで、それらを聞き質しては、私はそれを自分の研究の助け

にしてゐた。最近、特に訊ねたのは、*North China Herald*の記事についてである。本紙が第三者の史料として、太平天国史の研究に貴重なもので、そのマイクロ・フィルムが東洋文庫にあることも、私は知つてゐるが、文庫のフィルムは悪くて、とても見にくい。ところが河鱈君は辛抱強くそれを読み、主要なものはコピーし、何処にどんな記事があるかを知つてゐるので、私はしばしば彼に聞いて、フィルムを見る労を省いたり、彼の言を索引がわりに使つたりした。なお *North China Herald* を利用しようとする人は、東洋文庫の科研費研究成果報告書『近代中国にかんする新聞報道』にある河鱈君の報告、『ノース・チャイナ・ヘラルド』に見る欧米人の太平天国観』を参考にするとよい。太平天国史研究に必要な箇所の大體を知ることができ、また彼が撮つたコピーは、ご遺族から東洋文庫に寄贈されたので、なるべく早く整理して、研究者の用に供したいと思つてゐる。

私の見解に対して、彼に批判を求めるときもしばしばあつたが、明確な返答のないことが時にあつた。例えば「李秀成の書供や天京事変に関する西洋人の見聞録は当てにならない」という私の見解に対しては、良いとも悪いともいわなかつたが、話を総合してみると、私に反対なことはわかるから、まだいい。ところが「太平天国の前身ともいう

べき宗教結社を拜上帝会というのは誤りで、正しくは上帝会といふべきである」といふ意見に対しては、「駄目だ」とはいわなかったが、「良い」ともいわず、何も語ってくれなかった。それは、「よくわからないから黙っていたままで」と、私としては解釈したいところだが、果たしてそうかどうか。彼は気配りの人。あるいは私に遠慮して、無言のうちに否定していたのかも知れない。何れなのか、本当のところは今でも聞きたいのだが、もう天国に行かなければ聞けないのが、残念でならない。

私が河鱸君に助けられたのは、学問上のことだけではない。私も話好きの方だが、彼はそれに輪をかけていた。その話はザックバランで、家庭での好々爺ぶりや、同級生の消息など、四方山の話をよくしてくれた。話がうまいだけではない。すべてに人の好きがよく現れていて、毒気などいささかもないから、時の経つのも忘れて聞く私の心を自ら和ませてくれた。だから私は彼に会うのや彼から電話の来るのを楽しみに待っていたが、もうそれもかなわない。ひたすらに彼の冥福を祈るばかりなのが、何とも淋しい。最後に、河鱸君の功を端的に顕彰するものとして、その略歴と業績目録とを掲げる。敬称はすべて省略した。略歴は、彼が一九八五年に自ら書いたものに主として拠り、昨年、奥様にうかがって、若干を補ったものである。

略歴

一九一四年 二月一〇日、河鱸敦・政の次男として、東京牛込区南町二三に生まれる。

一九三七年 三月、東京府立四中、府立高等学校文科甲類を経て、東京帝国大学文学部東洋史学科卒業。卒業論文の題目は「高麗末に於ける政治的変革と李成桂」。四月、富山房に勤務、『国民百科大辞典』の編修に当たる。

一九三八年 三月、現役兵として関東軍に入隊。一九四二年一月まで、新京、牡丹江にて兵役に服す。

一九四三年 四月より一九四五年九月まで、海軍文官教官（海軍教授）として土浦・鹿児島海軍航空隊、海軍兵学校針尾（後に防府）分校に勤務。この間、一九四三年一月一九日竹岡勝也・芳の長女住子と結婚。

一九四五年 海軍教官退官後、山口経済専門学校（現山口大学経済学部）にて『支那社会経済大辞典』の編修に当たるも、翌年七月、事業中止により失職。この間、同校にて太平洋国の史料に接し、爾後、太平洋国史を終生の研究テーマとする。

一 九四六年 一〇月より一九五七年三月まで、小田原市立
高等女学校、小田原城東高等学校に勤務。

一 九五七年 四月、神奈川県立横浜立野高等学校勤務。

一 九六三年 四月、県立商工高等学校教頭。

一 九六四年 九月、県立厚木高等学校教頭。

一 九六五年 九月、県教育委員会管理部教職員課副主幹。

一 九六六年 九月、県立秦野高等学校長。

一 九六九年 九月、県立教育センター副所長。

一 九七二年 九月、県立横浜翠嵐高等学校長。

一 九七五年 八月三十一日、高校長を勸奨により退職。爾後
三年間、県立教育センター研修事務嘱託。

一 九七九年 四月、財団法人東洋文庫研究員。爾後その死
去にいたるまで、同研究員として太平天国史の研
究に専念。

一 九八〇年 四月より二年間、跡見女子大学非常勤講師。

一 九八一年 四月、愛知大学文学部（史学科）客員教授。

一 九八五年三月停年退職後、一九八九年三月ま
で、同大学文学部非常勤講師。

一 九九〇年 九月二九日午前九時一二分、小田原市立病院
にて、心筋梗塞による急性心不全のため死去。享年
七六才。遺族は、妻住子のほか、一女二男と孫
七人。

業績目録

【研究論文】

「天朝田畝制度」の成立について（『東洋学報』三三二、
一九五〇年）

太平天国における郷官設置の実態——蘇浙湖浜地帯の一例
によって（『東方学論集』一、一九五四年）

太平天国における郷官創置とその背景（『史学雑誌』六三
一六、一九五四年）

（英訳は、*Acta Asiatica*, No.12, 1967 にあり）
太平天国の関卡につづて（『和田博士古稀記念東洋史論
叢』、一九六一年）

太平天国占領下南潯鎮における湖糸貿易（『東洋学』一二、
一九六一年）

（英訳は、*Memoirs of the Research Department of
the Toyo Bunko*, No.37, 1979 にあり）

太平天国の官員となった商人たち——盛川稗乗によって
（『鈴木俊教授還暦記念東洋史論叢』、一九六四年）

天徳と太平王について（『論集近代中国研究』、一九八一
年）

『ノース・チャイナ・ヘラルド』に見る欧米人の太平天国観

〔近・現代中国にかんする新聞報道の研究〕本庄比佐
子編科研費研究成果報告書、一九八六年)

【研究発表・講演要旨】

高麗末期に於ける田制改革に就ての一考察(『歴史学研究』

七一九、一九三七年)

天朝田畝制度の成立(『史学雑誌』五九一五、一九五〇年)

太平天国における共同体的機構について(『史学雑誌』六〇

一一二、一九五一年)

太平天国における郷官制の性格(『史学雑誌』六一一一、

一九五二年)

太平天国郷官創置年代考(『史学雑誌』六一一一、一九五三

年)

上帝会と三合会との関係について(『史学雑誌』六三一一、

一九五四年)

太平天国占領下の南潯鎮における湖糸貿易について(『史

学雑誌』六五一一、一九五六年)

太平天国研究における問題点(『東洋文庫書報』一五、

一九八三年)

【研究動向】

支那氏族制社会の諸問題(『歴史学研究』六一七、一九三六

年。筆名は渡辺恒男、同級生江副敏生の命名の由)

天朝田畝制度をめぐる近年の研究(『東洋学報』四四一、

一九六一年)

太平天国と近代化の問題(『歴史教育』一三一一、一九六五

年)

太平天国研究の問題点——わが国の研究のあとをたどつて

(『近代中国』一、一九七七年)

李秀成親供についての諸問題(『近代中国』六、一九七九

年)

近代中国における太平天国史の研究(『近代中国研究彙報』

六、一九八四年)

天京事変に関する問題点(『近代中国研究彙報』一一、

一九九〇年)

【書評・論文評】

羅爾綱著『太平天国的理想国』(『史学雑誌』六一一八、

一九五二年)

簡又文著『太平天国典制通考』(『東洋学報』四四四、

一九六二年)

景珩・林言椒編『太平天国革命性質問題討論集』(『東洋学

報』四五一一、一九六一年)

商衍鋈著『太平天国科挙考試紀略』(『東洋学報』四五四、

一九六三年)

太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』(『東洋学報』四六三、一九六三年)

鄭純著『太平天国制度初探』増訂本(『東洋学報』四七一、一九六四年)

簡又文著『太平天国全史』(『東洋学報』四七二、一九六四年)

牟安世著『太平天国』(『近代中国』一、一九七七年)

洪秀全の思想の形成と展開——沈元著『洪秀全和太平天国革命』(『歴史研究』一九六三—二)(『近代中国』三、一九七八年)

小島晋治著『太平天国革命の歴史と思想』(『近代中国』七、一九八〇年)

朱宗震・薛瑞祿・林金樹著『韋昌輝偽造『天王密詔』説——關於太平天国史上『天京事變』の一点看法』(『中国農民戦争史論叢』一、一九七八年)(『近代中国』八、一九八〇年)

赫治清著『韋昌輝伏誅時日考』(『近代史研究』一九七九—一)(『近代中国』九、一九八一年)

(苑書義による漢訳は、『河北師院学報』一九八二—三、『復印報刊資料・中国近代史』一九八二—一にあり)

錢遠鎔著『李秀成『書供』原稿考弁』(『近代史研究』)

一九八一—四』(『近代中国』一三、一九八三年)

董蔡時著『太平天国在蘇州』(『近代中国』一四、一九八三年)

郭毅生著『太平天国經濟制度』(『近代中国』一八、一九八六年)

【その他】

偶像廃毀——中国「近代」の探究(神奈川県立小田原城東高等学校『学窓』一九五二年)

曾国藩——中国近代史研究の手引Ⅷ(『大安』五二、一九五九年)

太平天国(平凡社『アジア歴史事典』六、一九六〇年)

太平天国(『ブリタニカ国際大百科辞典』二二、一九七四年)

太平天国と日本(『月刊歴史教育』一七、一九七九年)(一九九一・一・一五記)